# 資料渉猟余話

その149

## 郷土の歴史を語る

### 美術誌『もくろく』〈下〉

鎌倉貞男

今回は、前回紹介した飯田に関係する『もくろく』三冊の中身を概観してみよう。総じて、売り立て品の多くは軸装の日本画である。それも、極く著名な中央の古美術名家の作品が少なくない。

それだけに作品の真贋や価値が気になるが、東京美術倶楽部も関与していることなので、それについては私見を加えず、同誌掲載の通りとする。

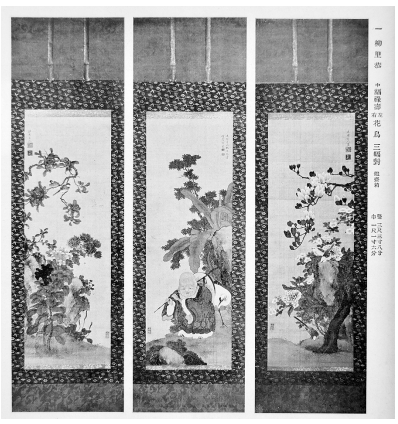
まず昭和二年目録である。ここで目立つのは、豪華な双幅（対幅。二幅が一対の掛け物）や三幅対（三幅が一対の掛け物）が多いことである。更には四幅対もある。きっと、格式のある大きな床の間に飾られたものであろう。

そうした作品の著名作家を挙げれば、狩野派中興の祖狩野探幽、土佐派を再興した土佐光起、江戸中期の文人画家池大雅、江戸南画を大成した谷文晁、江戸琳派を確立した酒井抱一等である。

他に柳里恭（柳澤淇園）・与謝蕪村・曽我蕭白・岸駒・松村景文・山本梅逸・岡本豊彦・高久靄厓・田中訥言等、各時代を代表する著名作家の作品が並ぶ。春草や大観の作もあるが、全体的には江戸時代に活躍した画家の作品が目立つ。

次いで昭和三年目録である。ここには、明治期に来飯した二人の在京著名作家、富岡鉄斎と田能村直入の作品が多数掲載されている。また、日本画の革新に尽力した横山大観や下村観山の作品も少なくない。総じて、①より時代的に新しい作品が多い。

外に、森寛斎・橋本雅邦・今尾景年・狩野芳崖・寺崎広業・奥原晴湖・川端玉章・野口小蘋・児玉果亭・田近竹邨・渡辺省亭・小室翠雲等、明治・大正画壇に盛名を馳せた作家の作品が目を引く。いずれも席画や下絵、色紙や扇面の類では無く、想を練り、意を凝らした本格的作品ばかりである。



①に載る柳里恭（柳澤淇園）の三幅対（鉄斎の箱）

そのせいであろうか。②には（前回も触れたが）、別刷りポケットサイズの『もくろく』もある。そこには写真こそ無いが、作品番号・作品名・作者名が四五ページにわたって列記されている。それだけ作品の質が高く、販路と収益が期待されたのであろう。

最後に昭和十六年目録である。これは大東亜戦争直前の発行だったせいか、前二冊に比して冊子が薄く、貧弱である。そのため、応挙や抱一、大雅や白隠等の作品も写真で示されているが、数は少ない。それよりも、ここではむしろ茶碗・茶釜等の茶道具を始め、香炉・花瓶・火鉢・硯箱等の道具類や調度品が多いようだ。

以上、三冊の目録の内容と特性を大まかに見てきた。三種（三家）それぞれに特徴があり、趣味や時代の相違も窺えるが、いずれもマニア垂涎の逸品が多く、美術館でも作れそうな気がする。それだけに、放出者の思いはさぞ複雑だったであろう。

②に載る大観の「観瀑」（共箱）

売り立てから既に八、九十年を経て、人々の美意識や芸術観も大きく変わった。これらの『もくろく』掲載品目には、洋画や彫刻作品等は見当たらない。そこに当時の人々の価値観と美意識が窺えるような気がする。

ともあれ、右の冊子は「信州の小京都」と言われた当時の飯田の暮らしと文化を語る重要な資料と言えよう。